



興部高校

PTAだより

第160号

令和4年3月1日発行

発行 北海道興部高等学校

PTA研修広報委員会

印刷 株式会社 ソーゴ

教育職員	12名
行政職員	3名
生徒数	
1年生	13名
2年生	11名
3年生	15名
計	39名

卒業に寄せて

北海道興部高等学校PTA会長

佐々木 良 樹

卒業生の皆さん、本日はご卒業おめでとうございます。

保護者の皆様、お子様が成長され今日のこの日を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。そして、校長先生をはじめ、先生方にはこれまで温かく時に厳しく、根気よく導いて下さいましたことを感謝申し上げます。

卒業生の皆さんにとって、興部高校で過ごした3年間はどうかたでしょう。

日々の学校生活の勉強や行事、部活動を通して、嬉しかったこと、辛かったこと、色々あったと思います。また、世界中が新型コロナウイルスに翻弄され、未だ感染の終息が見えない中、三年間の学校生活の内、二年間余り感染拡大防止対策によって、臨時休校のほか、部活動、見学旅行、入学式、卒業式など様々な行事に人数制限若しくは中止と余儀なくされ、共に時間を過ごすことができなかったのは、大変残念な思いでなりません。しかし、それぞれの機会の中で、多くの仲間と出会い、信頼し、時に人間関係で悩む、そんな経験も財産として、とても素晴らしい価値のあることだと思います。

今日は皆さんにとって、旅立ちの日でもあり、自立の日でもあります。私は皆さんが自分の選択に責任を持つような自立した大人へとなり、周囲の方々と良い関係を作りつつ社

会で活躍するような人たちになってほしいと願っています。

最後になりますが、卒業生の皆さん一人一人が輝かしい未来へ羽ばたいて行くことを願い、またそうなることを確信いたしまして、卒業生の皆さんにエールを贈ります。

ともに歩む

北海道興部高等学校校長

大橋 一 夫

三十年も前の話です。当時、同僚の先生が生徒会誌に寄せた詩を紹介します。

『ある夜、私は神様とともに、砂浜を歩く夢を見た。暗い夜空に、これまでの私の人生が映し出された。どの光景にも、砂の上にながりの足跡が残されていた。ひとつは私の足跡、もう一つは神様の足跡であった。これまでの人生の最後の光景が映し出された時、私は、砂の上の足跡に目を留めた。そこには一つの足跡しかなかった。わたしの人生で一番つらく、悲しい時だった。私は神様にお尋ねした。「神様、私はあなたに従うと決心した時、あなたはすべての道において私とともに歩み、語り合ってくださると約束されました。それなのに、私の人生で一番つらい時、一人の足跡しかなかったのです。一番あなたを必要としていた時に、あなたがなぜ私を見捨てられたのか私にはわかりません。」

神様は言いました。「私はあなたを決して見捨てたりはしない。足跡が一つだった

時、私はあなたを背負って歩いていたので。』(「足跡」メアリー・ステイブンソン)

当時私は、神様を意識していませんでした。離島の高校に着任して三年目。努力と地域の方や同僚とのチームワークで日々乗り切っていたからです。しかし、三十年経つと見方が変わってきました。「ひょっとしてあの時助けてくれた人は。あの時上手くいったのは。」神様のおかげというよりも、「誰かのおかげ」と思うようになったのです。振り返ってみれば、誰かのおかげの始まりは両親でした。そして先生や友達、先輩や職場の仲間と変化し、人数も増えてきました。自分でも気づかない誰かのおかげもあったように思います。

卒業していく皆さん、今までの「誰かのおかげ」に対し、おかげさまという感謝の気持ちを持ち、これから出会う多くの人の支えになってください。たとえ誰にも気づかれなくても「情けは人のためならず」。必ず自分にも返ってきます。

保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。親にとって、いくつになっても子供は子供と申します。今までとはまた違う距離感をとりながら、ともに歩む道のりは続いていくものごとく推察申し上げます。三年間、本校の教育活動に対しご理解とご協力をいただきありがとうございます。